

# コロナへの対応は 社会デザインの姿

東北工大北欧デザ  
イン研と宮城女子大

東北工業大学北欧デザイン研究所（所長・石井敏建築学部教授）と宮城学院女子大学生活文化デザイン学科（主催代表・厳爽教授）が主催するシンポジウム「社会のデザイン〜北欧諸国における新型コロナナとの向き合い方」が8月29日、ウェブを活用して開かれた。東北工大建築学部とフィンランド大使館が後援し



日本とフィンランド、スウェーデンの3カ国を同時中継配信した

た。

シンポジウムでは、日本とフィンランド、スウェーデン

の3カ国を同時中継配信し、現地在住の川崎一彦東海大名誉教授とグラフィックデザイナーの遠藤悦郎氏が、新型コロナウイルスへの北欧諸国の

対応状況や現地の様子などを報告し、オンライン参加者を交えてディスカッションした。

政府への高い信頼度を基盤にしたコロナ禍への向き合い方、両国での対応の違い、国内とは異なる医療体制や社会環境を背景にした国民の意識などについて幅広く議論した結果、正解のないコロナ対応

は、これまで培ってきた各国の社会の姿がそのまま反映される「社会のデザイン」がキーワードになることが示された。

また、石橋智晴氏（EN Lab.）によるシンポジウムの模様をリアルタイムで可視化するグラフィックレコーディングも実施。リアルタイムでアンケートなどを取り入れたオンラインならではのシンポは、テーマへの関心の高さもあって全国各地と海外から約210人の参加があった。

